

堤防への思い

河川の堤防がこんにちの姿になるまでには、長い歴史があります。その時代ごとに置かれた条件の中で、水害から暮らしを守るために、人々は懸命に努力、工夫してきました。徳島県海陽町と香川県さぬき市の例をご紹介します。

■海部川の奥浦堤防（徳島県海陽町）

徳島県海部町（現海陽町）奥浦は海部川右岸河口部に位置し、洪水時には海部川の濁流が流れ込み、人々は身一つで小高い山に駆け上ることを余儀なくされてきました。奥浦の住民にとって堤防を築くことは悲願でしたが、藩政時代には実現されませんでした。明治になって、戸長・岡川又五郎ら先覚者の働きにより、奥浦堤防（延長 132 間）が県営事業として施工されることになりましたが、総工費 4,570 円のうち 1,160 円の地元負担をどのように捻出するかが課題でした。奥浦の人々は幾度も寄り合いを開いて知恵を絞り、楠神社のご神木の楠を売却して地元負担金に充てることにしました。工事は明治 23 年（1890）5 月に起工、9 月に完成しました。しかし、明治 25 年の洪水を機に、対岸からの請願により奥浦堤防は一部を残して取り払われました。〈海部町史編集部編「海部町史」1971 年〉



■鴨部川の堤防（香川県さぬき市）

明治 17 年（1884）8 月 25 日、香川県鴨部下荘村（現さぬき市）で、烈風が起こり、波濤が狂奔し、堤防が決壊しました。家屋は流され、稲や甘藷など作物すべてが被害を受けました。人々は窮乏のどん底に陥りましたが、村民一同相謀り金穀を集めて被害の救済に当たりました。このことが聖聞に達して下賜金を賜いその難を救恤されました。そのことに人々は皆感激しました。鴨部川の土手に建つ水害記念碑には、天変地異は人の力では制御し得ないようであるが、なせばなるで、西洋の諸国では水利をよくし、オランダでは最長の堤防を固め人々を海より低い土地に居住させており、わが讃岐の人も心を一つにして堤防の安全に力を致し、長く安穩を保ち、この惨状を忘れないようにしたいと記されています。〈志度町史編さん委員会編「新編志度町史下巻」1986 年など〉

